

2007年春、フランス大統領選挙。そして？

法学部
田中 正人

5年前の5月1日。筆者は「美しい5月」のパリにいた。極右国民戦線FN総裁のルペンが2位となり、ジョスパン（当時首相）3位敗退という「晴天の霹靂」「政治的地震」をもたらした大統領選第1回投票直後のことだった。その日午前9時頃からはシャトレ広場でFNの集会を見物。リヴォリ通りを下ってジャンヌダルク像近くではルペンが大型ベンツから降り立つのを目撃。午後はバスティエユ広場へ。こちらの方は、反ルペン、共和政防衛の集会と共和国広場までのデモに加わるためであった。

それから5年。2期12年間大統領職にあったシラクが3選を目差すことなく引退。誰がその後継者に？初の女性大統領が誕生か？と大きな関心を集める中、昨年9月にはグラッキュス・パブーフ（！？）という筆名で『一騎打ち』なる政治小説が出版されもした。

12人の立候補者

フランス第五共和国第9代（6人目）大統領を目差して総計12人の候補者が立った。保守の大組織、人民運動連合UMPからは、ドヴィルパン首相ではなく、95年大統領選でのバラデュール支持ゆえにシラクとは冷たい関係のニコラ・サルコジ。自身ハンガリーからの移民の子でありながら（ソ連赤軍に所領を没収され、亡命を余儀なくされた小貴族の子であるがゆえに？）、05年10～11月に失業の影響を最も強く受けている、大都市郊外の

貧しい移民の若者を「社会のクズ」「ゴロツキ」と呼んで暴動の契機を作った人物。UMP総裁でありながら、首相とはならず、内相として移民規制、治安強化に努めた。首相として経済その他国政全体の実績評価を受けることを回避しようとする巧妙な立ち回りを見せていた。

左翼第1党の社会党PSからは、書記長オランド、元首相ジョスパン、ドミニク・ストゥロスカーク、切れ者ファビウスではなく、オランドの「内縁の妻」にして4児の母たるセゴレーヌ・ロワイヤルが昨年春以降急浮上して候補に。女性票を意識したとも考えられる。

前回02年の下院総選挙に向けて、シラクの唱える右翼単一政党結成に与しなかった中道右派のフランス民主連合UDFからはバイルが。FNからはルペンが5度目の立候補。移民排除を訴え続け、人種差別発言ゆえに公民権停止判決を受けたことさえある人物である。

争点

前回治安強化、移民規制強化、欧州連合EU拡大・強化統合の順で争点化していたが、今回はEU問題がやや後景に退いていた。グローバル化と欧州統合推進の中で、沈滞気味のフランス経済、これと関連する深刻な失業問題（8%超）、さらに購買力低下、環境、移民問題への対応が主要争点。サルコジはアメリカ流の新自由主義的路線による経済活性化、移民規制の強化、治安強化を主張した。ジョスパン政権時代に成立した週35時間労働制、手厚い社会保障制度が企業の国際競争力を低下させ、経済の低迷と失業率の高さを招いているのであって、週35時間労働制の見直し～柔軟な適用、社会保障の切詰めによって企業負担を軽減し、競争力を高めれば、景気は回復し、雇用も拡大する、という論理。これに対してロワイヤルは人権と平等、社会保障の充実と格差是正、弱者救済を訴えていた。

第1回投票結果

4月22日の第1回投票の結果、サルコジが31.1

%、ロワイヤルが25.8%、バイルは18.6%、ルペンは10.5%。第2回投票にはサルコジとロワイヤルが進むこととなった。この結果以外に、フランス国民=有権者の投票行動からは、いくつかの注目すべき現象が観察された。

第1に、高投票率。好天ゆえに(あるいは、にもかかわらず?)、02年の第1回投票の際の71.6%を上回り、第5共和政における大統領直接選挙として最高数値の84.6%を記録。

第2に、中道派の得票率上昇。前回の8.7%から18.6%へほぼ倍増。

第3に、左右両極の後退。極右候補ルペンへの支持の低下(前回の17.2%から10.5%へ)と極左諸候補の低迷(また、共産党候補ピュフェの得票はわずか1.9%)。ルペンの得票低下は、移民問題への厳格な対応を訴えるなどしたサルコジのキャンペーンに支持層を切り崩されたから。極左票の低下はロワイヤルが「有意義な投票」を訴えたことが一因であろう。

いま一点、出口調査によれば、投票動機の間では、サルコジへの投票者は治安強化と移民規制が強く、これに対してロワイヤルへの投票者は社会的排除と不安定雇用とに対する闘いを挙げていた。将来への願望の間では、サルコジへの投票者は「より秩序と権威のある社会」を、これに対してロワイヤルへの投票者は「より個人の諸自由が認められる社会」を希求していた。かつての左翼vs. 右翼とは異なる対立図式が見られるのではないか。

決選投票へ

第1回投票後から2週間にわたる両者の激しい闘い。共産党、エコロジスト、極左の候補たちがロワイヤル支持を表明し、左翼のほぼ全政党・政党がロワイヤルの側についた。

5月1日、恒例のバリ集会でルペンは、「われわれの綱領を横取り」したサルコジに復讐しようとしてロワイヤルに投票することにも、当のサルコジに投票することにも反対する立場から棄権を訴えた。

両者がもっとも重視したのは中道右派。バイルは自分の支持者層に対して明確な指示を出さなかった。6月の下院選に向け、全選挙区で候補を立てるべく民主運動 Mouvement démocrate の結成を目差しているバイルにとって、左翼と右翼との対決図式に埋没することを避けたかったのであろう。しかし、バイルとロワイヤルは28日にテレビで対談(サルコジはバイルとの対談を拒否)。5月2日夜の150分に及ぶサルコジとロワイヤルとの間のテレビ討論(総人口の約3分の1の2000万人が視聴)では、ロワイヤルの攻撃的姿勢とサルコジの静かで穏やかな守りの姿勢が目立った(直後の世論調査では53%がサルコジの方が説得力ありとの結果。強面のサルコジがソフトイメージを装った形。セゴレーヌの喧嘩腰が嫌われたのか)。いずれにせよ、この討論は大勢に影響を与えず。ロワイヤルからすれば形勢逆転の契機とはならず。直後にバイルは、「サルコジには投票しない」旨(棄権か、ロワイヤルに投票かは詳らかにせず)、個人的に意思表示。完全中立ではなく、サルコジ拒否の姿勢を示したのである。他方、UDF議員の多くはサルコジ支持だった。

5月6日の第2回投票

この日もほぼ全国的に好天。投票率は84%(前回02年の第2回投票はシラクの勝利が確実視されていたために79%止まりであった)。得票率はサルコジ53.1%、ロワイヤル46.9%。サルコジが初の戦後生まれ(ロワイヤルも)の大統領に選出された。出口調査によれば、第1回投票の際にバイルに投票した有権者のうち40%がロワイヤルに、サルコジにも40%以上が流れた。バイルに投じられた682万票の60%以上がロワイヤルに回れば勝利の目もあったとされたのだが、5月に入ってサルコジに回る割合が上昇。ルペンへの投票者のうち、ルペンの指示に反してサルコジに投票したのは60%であった。サルコジの勝因は、投票分析からは極右支持層から中道右派支持層までの票を得たことによる。社会経済的な階層では、サルコジはやや高年齢層、高所得階層での得票率が高く、

ロワイヤルは低年齢層（20歳台半ば~30歳台半ばの世代を除く）と低所得階層において高かった。地域的には六角形の本土フランスの右上半分（おおむねオイル語圏）は右翼・サルコジ支持、左下（同、オック語圏）は左翼・ロワイヤル支持が強いという分布が見られた。

下院総選挙とその後

これから組閣、誰が首相に？ポルローか？それはさておき、この結果を受けつつ、6月10日および17日には下院総選挙。この選挙は、小選挙区制の下、絶対多数代表制で実施される。すなわち、第1回投票で有効投票の過半数を得た候補者がなければ、第1回投票での得票率12.5%以上の者が第2回投票で決着を付ける方式（おおむね左翼と右翼の候補者2人の間での決選投票となるが、極右候補などが条件をクリアして3人による第2回投票もある）。PSと民主運動 MoDem（旧 UDF）との間で選挙提携が結ばれるのか？それとも MoDem は入閣という餌につられて、UMP と手を結ぶのか（この場合、民主運動のアイデンティティは弱まることとなるが）？そしてサルコジ大統領と党が維持されるのか？

81~95年の2期14年間にわたったミッテラン政権、その後のシラク政権第1期には、ドゴール憲法が想定していなかった事態、すなわち左翼の大統領と右翼の首相＝内閣、あるいはその逆の形で保革共存（大統領与党と首相与党＝議会多数派とのネジレ）が3度存在した。内政は内閣、外交は大統領、という棲み分けが慣行として成立してはいる。さて、6月の下院総選挙には、保革共存を回避しようとする民意が働くのであろうか。さて、さて??（2007年5月13日脱稿）。

サルコジの任命した首相はフィヨン。6月総選挙を前に積極的に改革政策を提起。その効果もあって、直近の世論調査ではUMPおよびPSの得票率はそれぞれ42%、28%と予測されており、UMPは577議席中最大で430議席を獲得する、という読みもある。1年前のシラク政権が支持率20%台と

崖っぷちにあった事態とは天と地の違いである。なぜこうした急激な変化が？この点については別の機会に考えてみたい（2007年6月9日加筆）。